32

医学史家・小川政修

佐藤　裕
北九州市立若松病院医史学会福岡地方会

大正十二年九州帝国大学医学部に細菌学講座を興し初代教授となった小川政修（おがわ まさなが）は、昭和六年に第一書房から「泰西医学史（古代、中世篇）」を上梓した。この序文において「私は（東京帝国大学の）学生時代から医史学に興味を持っていたが、大学にそういう講座がなかったので系統的知識を得ることができなかった。ただ心任せに読んだものを抜き書きしておいただけであるが、いつか断片的知識を整理したいと考えていた。この書が学問上いささかでも裨益するところがあれば、精神的に酬いられること多大である。昭和三年の外遊の際にライプチッヒ大学の医史学講座を訪ねて、ズートホフ（Sudohoff）教授の後を継いだシゲリスト（Sigerist）教授に会い、著書を送られたりいろいろな史料をみせていただいた。――医学の発達変遷の史実は一六世紀の文芸復興時代に入り、パラケルズス、ヴェザリウス、パレ、ハーヴェイらの登場によりいよいよ佳境に入る。さらに稿を続けて近世医学史を書き上げたいと思う」と述べている。そして、昭和十年に定年退官すると東京に居を移し、母校で医学史を講じる傍ら、近世以降の医学史の著述に精魂を傾け、昭和十八年「西洋医学史」を刊行するに至った。小川政修の著した「西洋医学史」は、日本の医学史研究のバイブルとなっている富士川の「日本医学史」に匹敵する著作であり、Garrisonの[An introduction to the History of Medicine]を凌駕するほどの内容を含む大著であると言っても過言ではない。

この「西洋医学史」の序文に、ウンデルリッヒ（Wunderlich）著の医学史の序説を引用して、医学史には（一）疾病史、（二）医師の作業及びその本領の沿革、（三）医学的知識の発達史、という三つの主眼点があるとしている。さらに続けて「医学は日進月歩の活学問であり、その変遷発達には必然的根拠がある。個々の事実は、斯学の漸進的発達過程の個々の要素で

あり、その系列には必然的関係がなくてはならぬ。前の学説なくして後の学説が突如として成立もしなければ出現もせぬ。旧い学説は多少の誤謬や欠陥を含んでいても、必ず何等かの新しい知見の萌芽を内臓している。されば、個々の事実の由来するところを繙ね、その必然のゆえんを究め、その因果関係を審にするところにこそ、最大の意義は存すると謂わねばならぬ」と述べている。

また小川政修は久保猪之吉と同様に重要な医学書（希観本）のもつ教育的価値に着目し、多くの貴重医学書を蒐集し後世に残した。特記すべき貴重図書としてあげるべきものが、一五五五年版（シッペル版）のヴェザリウスの「ファブリカ」と、アンブロアーズ・パレの「パレ全集」である。また、パラケルズス研究に先鞭を付けたのも小川政修である。

西洋医学史の序文に「我邦における斯学（医史学）研究の気運は次第に盛となり、今や諸処の大学に講義が開催せられ、また学会の設立をみるに至ったことは、学界のために洵に慶賀に堪えない。そして拙著がいささかなりともこれに寄与し、参考の一端に資せられることを得ば、本懐此に過ぐるものはない。」とある。なお文中の「学会設立」というものの一つが、昭和十五年五月六月に設立された「福岡医学史話会」と思われる。九州大学が中心となって「医学文献の渉猟と医学者の伝記及び医学とその社会文化との関係、並びに医学の方法論的研究を主し、医学及び医界の向上に資せんとする」との趣旨で発会したものである。第一回目の会合で平光吾一解剖学教授が「世界医学史の外廓と日本近代医学の推移」と題して講演を行っており、同年十月に九州大学で開催された第四十一回九州沖縄医学会においては医史学が一分科会となり、十四題の演題が発表されている。なお、同じ頃に慶応大学にも藤浪剛一を会長として、富士川游、山崎　佐らを顧問とする医史学研究会が発足しているのである。